

### 伊勢神宮式年遷宮 新正殿の灯火用

# 太田油脂(岡)つばき油奉納



①原料となったツバキの種。左側は皮を取り除いた状態。②式年遷宮の中心行事として知られる十月の「遷御」で、つばき油一いずれも岡崎市福岡町で



## 前から受注 太田社長「技術評価、誇り」

二十年に一度、社殿を新しく建て替える伊勢神宮(三重県)の式年遷宮で、新しい正殿を照らす灯火の燃料となるつばき油を、岡崎市中心行事として知られる十月の「遷御」で、遷宮に続き二回目。太田健介社長(右)は岡崎にも、遷宮に関わっている企業があることを知ってほしい」と話す。(高橋健一) 照らされるが、燃やし

つばき油が使用されても、すすの出が少ないうつばき油が伝統的に使用されている。二神体が移る前に、新正殿を汚してはいけないという考えからという。太田油脂は一九〇二

(明治三十五年創業。六二年から毎年、通常の神事の時に使用される菜種油を伊勢神宮に奉納している。二十年前の遷宮の時、つばき油を初めて受注した。太田社長は「技術が評価されたことで、ものづくりを担う者として誇りに思う」と話す。製法は、原料となるツバキの種の皮を取り、数十分間蒸す。搾油機で絞り出し、不純物を取り除く。奉納する量は十キロになる。原料となった種は、伊豆諸島産を選んだ。品質が良いことに加え、噴火で被災した三宅島の復興支援になればという願いも込めた。

「自信を持って送り出せるつばき油ができた。次の遷宮は二十年後。できれば次の世代にも技術を伝えたい」と太田社長。今回の製造過程の様子をDVDで収録している。二十三日には出発式があり、神事後、車で神宮に送られる。